

九州における一野式系土器と中原式Ⅲ～Ⅴ式土器の様相

—縄文時代早期の貝殻文円筒形土器の研究—

大 坪 芳 典

2023年3月

『西海考古』第13号 抜刷

九州における一野式系土器と中原式Ⅲ～Ⅴ式土器の様相

—縄文時代早期の貝殻文円筒形土器の研究—

大坪 芳典

はじめに

縄文時代早期前葉から中葉に移る頃に九州では、貝殻文円筒形土器の一野式系土器や中原Ⅲ～Ⅴ式土器が用いられていた。ここで一野式系土器とするのは、一野Ⅰ式土器、一野Ⅱ式土器、下末宝式土器といった同一系統の円筒形条痕文土器を総称したい。この一野式系土器とは、基本的に条痕文を施す円筒形土器が主体を成すが、量にしたら少ないが撚糸文を施す円筒形土器も含める。

これらの貝殻円筒形土器は、一野式系土器が長崎県を中心に分布し、また中原Ⅲ～Ⅴ式土器が熊本県や南九州に分布していると言った事が地域単位の研究で発表されているものの、九州全域の様相を広域に解明されるまでは至っていない。この原因としては、一野式系土器と中原Ⅲ～Ⅴ式土器は、これまで当該期研究者の間で類似する土器として認識されていたが、両者を具体的に比較検討するところまで踏み込んだ研究が成されてこなかった事による。筆者は、地域研究として一野式系土器を中心に研究を重ねてきたが、『西海考古』第11号でも述べたように中原Ⅲ～Ⅴ式土器との関係性を明らかにすることを課題に挙げた。いつか両者を分析する必要があるという思いから、中原Ⅲ～Ⅴ式土器の実態を解明するために、いよいよ2021年、筆者は熊本県文化財資料室に保管してある中原Ⅲ～Ⅴ式土器の設定の骨組みとなった蒲生・上の原遺跡の土器を調査することにした。本稿ではその結果をもとに両者の実態を明らかにしたい。

1. 一野式系土器の研究の現状

一野式土器は、1998年、水ノ江和同氏により弘法原式土器の時期を大分編年の稲荷山式土器の頃に位置付けて型式を設定した（水ノ江 1998）。

また、2012年に筆者は、2009年より示唆していた瘤を有する土器を一野式土器から新たに別けて下末宝式土器と設定した（大坪 2012）。

2016年に筆者は、一野式土器を一野Ⅰ式土器と一野Ⅱ式土器に細分した。また、下末宝式土器の設定の再確認を行い、一野Ⅱ式土器に後続させた。下末宝式土器には弘法原式土器が後続するが、弘法原式土器の後に位置付ける押型文土器の百花台Ⅰ～Ⅲ式土器をさらに詳細に定義付けた。これにより、西北九州の縄文時代早期の編年の変遷は、「小ヶ倉式土器→一野Ⅰ式土器→一野Ⅱ式土器→下末宝式土器→弘法原式土器→百花台Ⅰ式土器→百花台Ⅱ式土器→百花台Ⅲ式土器→手向山式土器→妙見・天道ヶ尾式土器→平楯式土器→塞ノ神式土器→苦浜式土器→右京西式土器→轟A式土器」のような長崎編年と言えるほどまでに構築できたと言える。

2020年、筆者は、これまで位置付けてきた年代観を大きく変える事になった。その原因としては、1998年当時、坂本嘉弘氏が提示した九州の早期土器の時間的ものさしとも言える大分編年で瘤が付く無文土器を稲荷山式土器に共伴させていたが、その後の研究の進展により、瘤が付く無文土器は、陽弓式土器として新たに設定されて、押型文土器よりも古く位置付けられた（綿貫 1999、鈴木 2003、遠部 2003a・2003b・2004a など）。この様な研究の進展により、九州の早期研究で時間的なものさしとされる大分編年の変更に伴い、その実情に合わせて『西海考古』第9号を始めとする2016年までの

論文で発表した年代観を改めた（大坪 2020a・b）。このため、下末宝式土器を大分編年の陽弓式土器と併行させる事により弘法原式土器が大分編年の川原田式土器と稲荷山式土器と、百花台Ⅱ式土器が大分編年の早水台式土器と併行するように時間的な位置付けを変更した（大坪 2020a・b）。

2. 一野式系土器とは

一野式土器は、水ノ江和同氏が島原市有明町の一野遺跡の出土遺物をもって標式土器として設定した。水ノ江氏は、一野式土器について「貝殻文円筒形土器で普通は条痕文土器と呼ばれている一群」で「底部は平底で、器形と口縁部ともほぼ立ち上がる円筒形。口縁部から胴部上半にかけて、二枚貝の腹縁を器面に押しつけ横位に条痕文の文様を3～6条巡らすのが最大の特徴である。器面調整はナデで、横位の条痕文の施文部については、同一原体による縦位の条痕文が横位のそれの下に窺えるが、これは器面調整と文様の両方の要素を兼ね備えているようである。横位の条痕文の文様については、ごく緩やかな波状文や押引文の手法により一見山形の押型文のように見えるものもある。～（略）～押型文とは明らかに異なったものである。～（略）～貝殻円筒形土器には無文土器が存在しないことである。」と説明している（水ノ江 1998：p. 11）。その他、器形の特徴として口唇部に面取り調整を行うものもある。水ノ江氏は、型式設定を行う際に時間的な位置付けを、弘法原式土器に先行する土器群としている。その後、筆者が細分や設定した一野Ⅰ式土器、一野Ⅱ式土器、下末宝式土器について説明する。

① 一野Ⅰ式土器

一野Ⅰ式土器（第1図6）は、畑中遺跡で出土した土器をもって設定したが、口唇部に面取りを行い、器壁が厚い。比較的径の小さい底部で、平底かつ円筒形の器形である。口縁部の外面に二枚貝腹縁による条痕文を施し、その文様帯が幅狭な文様帯を最大の特徴とする（大坪 2016）。

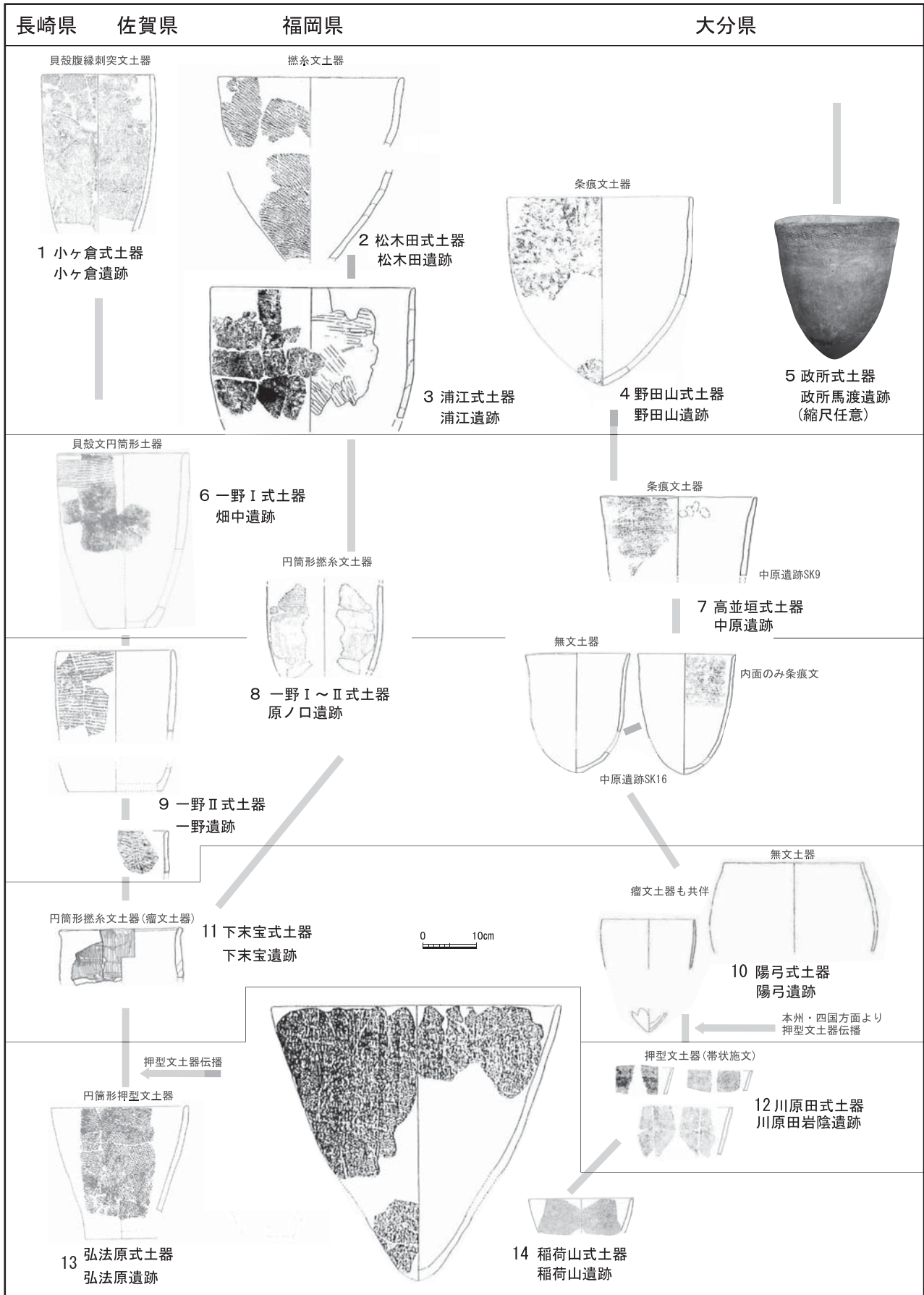
ところで、型式名称を畑中式土器ではなく一野Ⅰ式土器としたのは、文様帯を除いて基本的な属性が一野式土器と共通し、大枠として一野式系統の土器の範疇で捉えたいためである。ただし、土器編年では、新旧関係を示すために一野式土器を細分して「一野Ⅰ式土器」と設定した。一方で従来の一野式土器とされていたものを「一野Ⅱ式土器」と呼んで新たに設定した。

一野Ⅰ式土器は、2016年時点で川原田式土器ないしそれより古く設定していた（大坪 2016）が、現時点では大分編年の高並垣式土器との併行関係で考えたい。中九州の土器とは、木崎氏が設定した中原Ⅲ式土器と併行すると考えられる。

一野Ⅰ式土器の主な出土遺跡は、島原市畑中遺跡、南島原市宮野遺跡・上畔津遺跡と事例が少ない。また、一野Ⅰ・Ⅱ式土器の一種と考えられる円筒形燃糸文土器（第1図8）が、春日市原ノ口遺跡、大野城市本堂遺跡などで出土している（林 2006）が、これらが、一野Ⅰ式土器から下末宝式土器のどの段階のものかは今後の検討が必要である。

② 一野Ⅱ式土器

一野Ⅰ式土器に後続する一野Ⅱ式土器は、従来、一野式土器と呼ばれていたもので、一野Ⅰ式土器に比べて文様帯が広く、文様帯が器高に対して凡そ2分の1を占めるものが大半である。口縁部から胴部にかけてに文様帯があり、貝殻により横走する条痕文を施すものや波状のものもある。中には、横位の条痕文の下に縦位の条痕文があるものがあり、単なるケズリ調整の残りではなくて、文様として残しているものも認められる。また、一野Ⅱ式土器の中には、条痕文を不定方向に粗く施文するも



第 1 図 縄文時代早期前半の九州北部の土器編年表 (大坪 2020a) (任意縮尺)

の（第1図9の下の土器）があり、時期的に下末宝式土器に変遷する過程の退化現象の土器として考えられる。器形は、円筒形で底部が幅広な平底である。

一野Ⅱ式土器の主な出土遺跡は、長崎県で島原半島を中心に大村市を北限とし、東に福岡県八女市、北東に春日市や大野城市と広く分布している。さらに広域に見ると大分県では、高並垣式土器と併行すると考えられる。

③ 下末宝式土器

一野Ⅱ式土器に後続する下末宝式土器は、2012年、南島原市の下末宝遺跡の出土遺物をもって設定した（大坪 2012）。下末宝式土器の属性については、器形が円筒形土器で、一野Ⅱ式土器が胴部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がるのに比べて、この土器は胴部を最大径として口縁部の径が僅かに小さく、また、口縁部が外反気味である。底部は確認されていないが、一野Ⅱ式土器で見られるような平底と考えられる。器壁の厚さは、1㎝程と厚みがある。文様は、外面に撚糸文を横走施文後に縦走施文する。また、加えて斜方向施文も見られる。内面に横方向にナデ調整を施し、指頭圧痕が見られる。口唇部は、丸く撫でる。最大特徴は、口縁部上端の外面に瘤文を有する円筒形土器という点である。

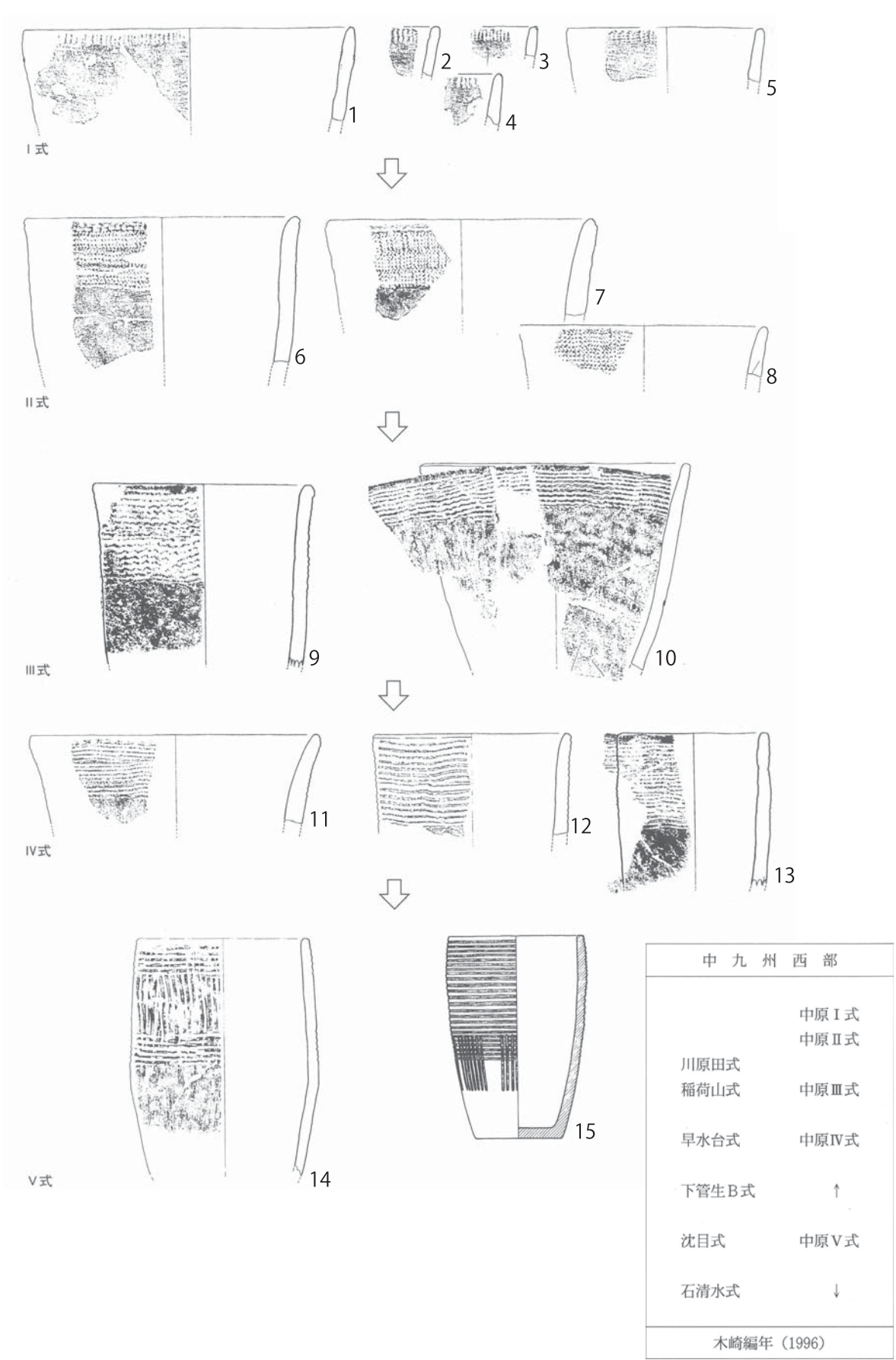
型式設定時、下末宝式土器の瘤文等の類似性から大分編年の稲荷山式土器と併行させていたが、昨今の研究の進展により稲荷山式土器とされていた一種で無文かつ瘤文が付くものを陽弓式土器として別型式が設定されたため、下末宝式土器は稲荷山式土器ではなくそれより一段階古い陽弓式土器と併行するように考えを改めた。瘤文以外で、陽弓式土器との類似点は、器形が胴張りで、胴部に対して口縁部の径が小さい点で共通性がみられる。この瘤文は、陽弓式土器よりも古い野田山式土器以前からの把手状に近い突帯からの系譜が追え、おそらく陽弓式土器は、大分・福岡県の分布域からの伝播により、一野Ⅱ式土器を母体とする土器に影響を与えて、下末宝式土器に受け入れられたと推察できる。その伝播の一端を現す遺跡に東彼杵町の松山A遺跡で出土している無文土器がそういう状況を示しているのではないだろうか。

3. 中原式系土器とは

一野式系土器と中原式系土器の関係を検討するにあたり、中原式系土器のⅠ～Ⅴ式土器について、まず整理したい。そもそも中原式土器とは、1995年、木崎康弘氏が『無田原遺跡』の報告書考察の早期前半編年表で、早期前半の中でも古手に位置付けて図示した。ただし、この中原式土器についての説明はない。1996年、木崎氏は、『蒲生・上の原遺跡』の報告書総括で和水町の中原西原遺跡から出土した遺物が初めて整理された遺物であると言う事で中原式土器と命名し、中九州西部地域における縄文時代早期前葉の土器型式として設定した（木崎 1996）。その総括の中で筒形条痕文土器を細分して、第1類から第5類に分類した。それを中原Ⅰ～Ⅴ式土器に読み替えて再設定を行った（木崎 1996・1998a）。

① 中原Ⅰ・Ⅱ式土器（第2図）

中原Ⅱ式土器とは、「貝殻腹縁による連続突刺が、口縁部から胴部上位に施文される土器を第2類の土器と呼ぶ。この土器には二種がある。一つは単一の文様帯で、もう一つは二つの文様帯からなる土器である。この中で、二つの文様帯を持つ土器では、口唇部と口縁部から胴部上位にかけてという二つの部位に文様がみられる。いずれの文様帯にも、貝殻腹縁による連続突刺文が施されている。」（木



第2図 中原式系土器の木崎氏編年 (木崎 1996)

崎 1996 : p. 210・1998 : p. 139)。一方で中原Ⅰ式土器は、口唇部と口縁部に貝殻腹縁による刺突文を施す特徴を持ち、政所式土器や小ヶ倉式土器そのものとは異なる。木崎氏は、「前平式土器の特徴と共通性がある」として、中原Ⅱ式土器より古く位置付けている。中原Ⅱ式土器の設定は、文様を中心として分類し設定されており、器形に関しては、円筒形条痕文土器として分類するが底部形態は不明である。さて、中原Ⅱ式土器は、政所式土器と土器の属性に類似点が多い。その賀川氏が設定した政所式土器の特徴づける4つの特徴を上杉彰紀氏は、「①口縁部外面に貝殻腹縁刺突文を縦位に施す、②丁寧なミガキ調整によって器面を平滑に仕上げる、③器壁が1 cm以上と厚手である、④尖底である」という4点に集約されると整理した(上杉 2005 : p. 14)。その①～③の属性は、中原Ⅱ式土器と類似するが、中原Ⅱ式土器の設定では、上杉氏が賀川氏設定の政所式土器を4大特徴で説明した内の④の底部形態の情報が欠失している。そのため、中原Ⅰ・Ⅱ式土器の底部の形状が明確になれば、もし平底なら小ヶ倉式土器との関連性が、尖底なら政所式土器と関連することが考えられよう。ただし、中原Ⅰ・Ⅱ式土器が政所式土器や小ヶ倉式土器と同じ類いの型式になるかといえば、唯一異なる点がある。型式設定時の政所式土器と小ヶ倉式土器は、口縁部外面に貝殻腹縁による刺突文を施すのに対して、中原Ⅱ式土器は口縁部への刺突文様帯のみでなく、口唇部にも異なる文様帯を施すのが特徴的と言える。そのため、この特徴をもつ中原Ⅰ・Ⅱ式土器を中九州の熊本県一帯に分布する型式として捉えて、政所式や小ヶ倉式土器とを混合して用いるのを避けたい。

② 中原Ⅲ～Ⅴ式土器(第2図)

中原Ⅲ式土器とは、「貝殻腹縁による押引文が、口縁部から胴部上位に施される土器を第3類の土器と呼ぶ。この文様は、貝殻を押し引く際に、微妙にその位置がずれることにより、山形押型文のような痕跡となるものと、条線状になるものがある。文様帯は、基本的に単一であるが、貝殻腹縁による押引文を口唇部に施す例も見られる。」と設定した(木崎 1996 : p. 210・1998 : p. 139)。この中原Ⅲ式土器の中で山形状の貝殻腹縁文を施すような土器は、長崎県では見られない。

中原Ⅳ式土器とは、「貝殻腹縁による条線文が施される土器を第4類の土器と呼ぶ。文様帯の範囲は、口縁部から胴部上位に限られている。文様は、貝殻腹縁を滑らかせるようにして付けられる条痕文のものである。文様帯は、単一であるが、貝殻腹縁による押引文を口唇部に施す例もみられる。」と設定した(木崎 1996 : p. 211・1998 : p. 139)。

中原Ⅴ式土器とは、「胴部器面の広い範囲に貝殻腹縁による条線文が施文される土器を第5類の土器と呼ぶ。文様帯の範囲は、口縁部から胴部中位、さらには下位近くにまで見られる。文様は、貝殻腹縁を滑らせるようにして付けられた条痕文のもので、縦施文と横施文とが複合されている。」と設定した(木崎 1996 : p. 211・1998 : p. 139)。中原Ⅳ・Ⅴ式土器の設定を見る限りは、一野式系土器と類似性がある。

4. 蒲生・上の原遺跡出土の中原式系土器の資料調査について

この様に一野式系土器と中原式系土器の現状を整理したが、一野式系土器と中原式系土器の一部の土器の属性に類似点や一部に相違点が見られる。

木崎氏の中原式系土器の編年は、1996年発刊の蒲生・上の原遺跡の報告書の中で詳しく設定されるほど、氏の編年の根幹に蒲生・上の原遺跡の出土遺物が大きく影響している事が推察できる。そのため、本稿冒頭に記したように中原式系土器の実態を解明する目的で、2021年、筆者は熊本県文化課からの資料調査の許可を得て、熊本県文化財資料室に保管してある中原式系土器の設定に重要な資料と

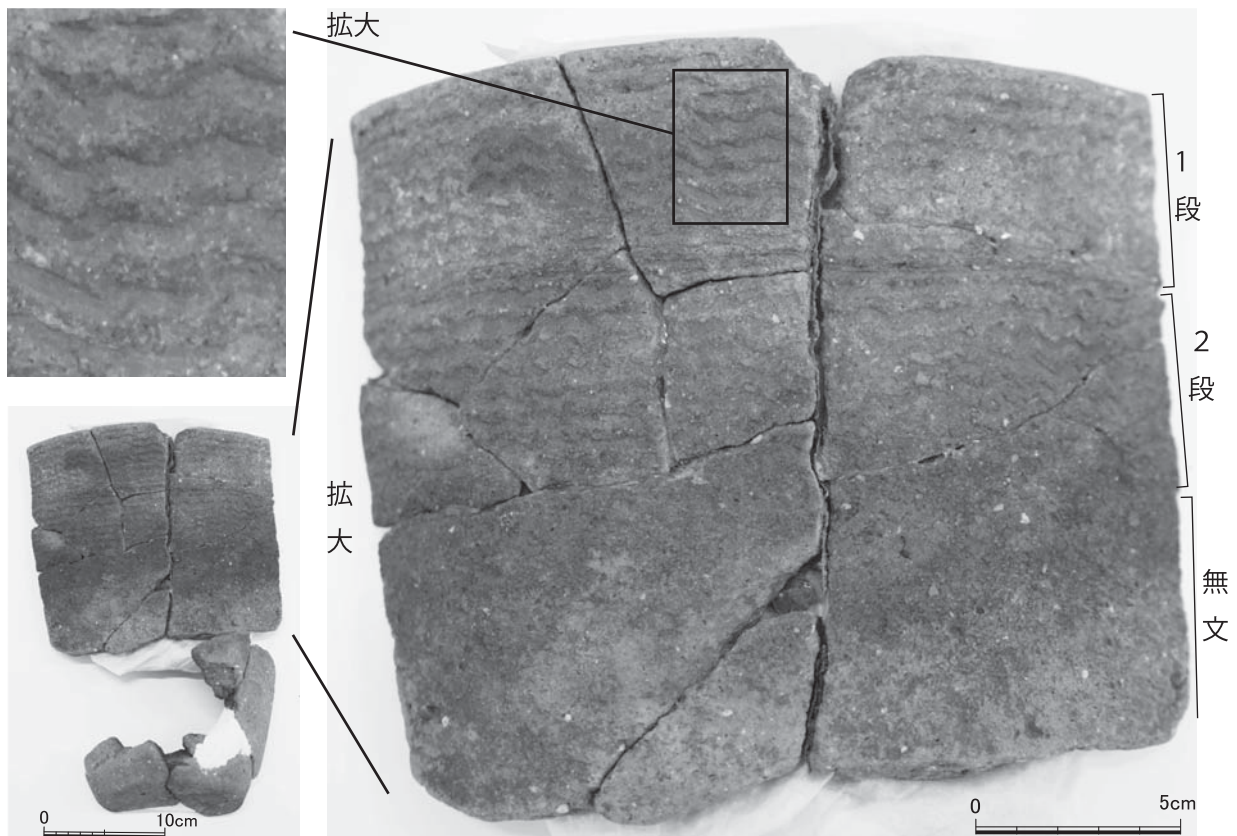


写真1 中原Ⅲ式とする土器（本稿：第2図9、蒲生・上の原遺跡報告書：第9図1・2）

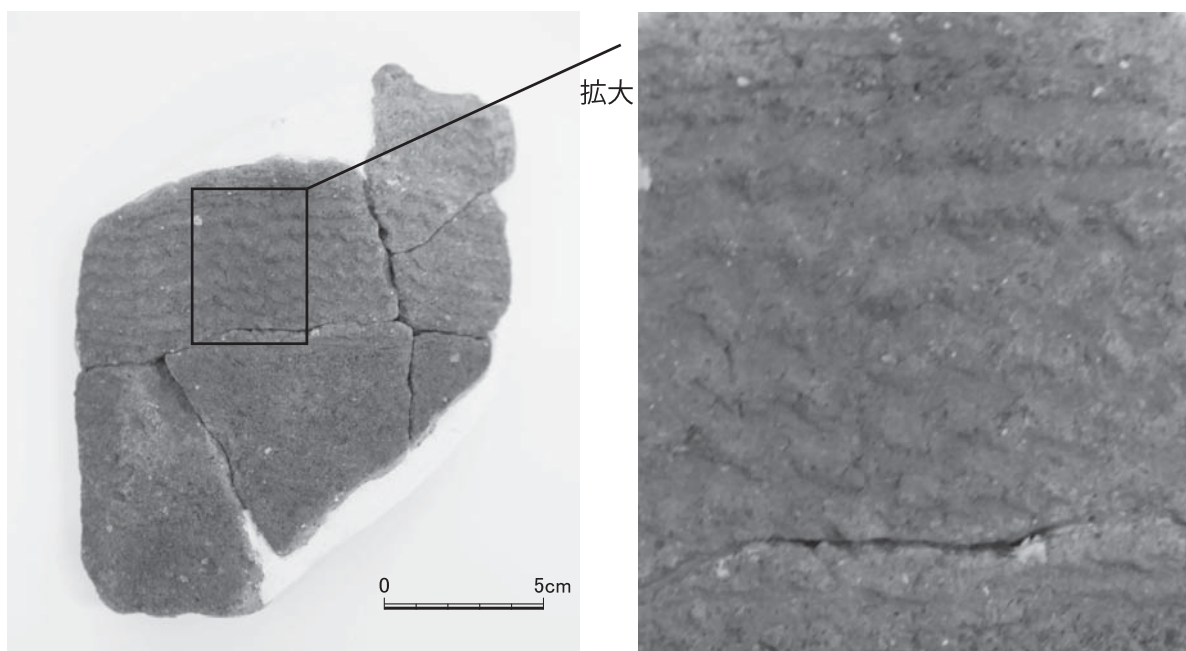


写真2 中原Ⅲ式とする土器（蒲生・上の原遺跡報告書：第9図3）

なった蒲生・上の原遺跡の土器を実見により調査した。

蒲生・上の原遺跡は、熊本県山鹿市大字蒲生字上の原に所在し、1992・1993年に熊本県教育委員会によって発掘調査が実施された。当遺跡から出土した縄文時代早期の遺物は、中原Ⅲ・Ⅳ式土器、無文土器（陽弓式土器）、押型文土器（川原田式～早水台式土器）などが出土しており、中原式系土器に関して言えば、中原Ⅲ・Ⅳ式土器が纏まった資料である。木崎氏が中原式土器の型式設定のために編年表で用いた資料は、第2図の9番と13番である。

① 中原Ⅲ式とする土器（第2図9）

中原Ⅲ式土器に位置付けられている第2図9番（『蒲生・上の原遺跡』報告書第9図1・2、本稿写真1）や『蒲生・上の原遺跡』報告書第9図3番、本稿写真2の土器は、その報告書の説明で「円筒形条痕文土器1 この土器は、口縁部から底部までの資料が揃い、円筒形条痕文土器の中では唯一、その全体像が分かる資料である。反転復元した口縁部径は、20.3㎝で、底部径は、10.5㎝である。器高は、27㎝前後である。器壁の厚さは、1.2～1.5㎝である。文様帯は、口縁部下9㎝までの範囲である。胴部上位にある。その文様は、ハイガイの貝殻腹縁を連続的に押し引いて施されており、結果的にはその痕跡は山形押型文のような細かい波状となる。胴部中位以下は、ていねいに撫でられており、無文帯となっている。また、内面も同様にナデによって無文となっている。器形は、円筒形で、胴部下位からしだいに底部まで窄まっていくという状況を呈している。」という所見である。

さて、今回の資料調査で確認した写真1・2の土器は、文様が報告書の説明にある「貝殻腹縁による波状の条痕」の様にも見えるが、「棒状工具を用いた山形押型文」である事が判明した。あくまで百歩譲った話であるが、筆者の鑑定の誤りで仮にこれが押型文でなかったとしても、当時の土器製作者が山形文を認識した上で模倣して文様を付けたに違ひなからう。口縁部の外面に4.5㎝程の長さの棒状工具を上下2段に回転施文している。段ごと（施文単位）の継ぎ目は、回転施文具特有の若干の重なりが見られる。外面の文様構成は、口縁部が山形押型文で、その下の胴部はナデによる無文である。内面もナデによる無文である。器壁は厚手である。円筒形かつ山形文様を付ける事から、弘法原式土器に類似する。

② 中原Ⅳ式土器（第2図13）

中原Ⅳ式土器に位置付けられている第2図13番（『蒲生・上の原遺跡』報告書第9図3）の土器は、その報告書の説明で「円筒形条痕文土器2 文様帯は、口縁部下9～10㎝までの範囲の胴部上位にある。その文様は、ハイガイの貝殻腹縁を連続的に押し引くというよりも、引っ張って付けられている。従って、その痕跡は、押し引きの手法による場合の細かい波状を呈さず、緩やかにうねる直線となる。胴部中位以下は、ていねいに撫でられており、無文帯となっている。また、内面も同様にナデによって無文となっている。器形は、円筒形である。おそらく、胴部下位からしだいに底部に向かって窄まっていくのであろうが、具体的な事は分からないとする。」という所見である。

さて、今回の資料調査で確認した写真3の土器は、所見の通り円筒形の器形で、貝殻腹縁文を横方向に押し引きかれた条痕文であった。西九州地域では、一野Ⅰ式土器に比べて文様帯の幅が広い事から一野Ⅱ式土器と同一の土器であると認定したい。

③ その他の土器

今回の本題である中原式系土器の研究の趣旨から若干外れるが、今回の蒲生・上の原遺跡の資料調



写真3 中原Ⅳ式土器（本稿：第2図13、蒲生・上の原遺跡報告書：第9図3）



写真4 条痕文土器（蒲生・上の原遺跡報告書：第17図4）



写真5 陽弓式土器（蒲生・上の原遺跡報告書第23図8）

写真1～5は熊本県教育委員会提供による

表1 九州縄文時代早期編年表

		西北九州(長崎)	西九州(佐賀)	北部九州(福岡)	東九州(大分)		中九州(熊本)	宮崎	南九州(鹿児島・宮崎)
早期前葉	貝殻文円筒形土器	小ヶ倉式土器	小ヶ倉式土器	松木田式土器 浦江式土器	野田山式土器	政所式土器	中原Ⅰ式土器 中原Ⅱ式土器	前平式土器 別府原式土器(古) 政所式土器	前平式土器 加葉山式土器 吉田式土器
		一野Ⅰ式土器 一野Ⅱ式土器	高並垣式土器	一野Ⅰ式土器(燃糸文土器含) 一野Ⅱ式土器(燃糸文土器含)	高並垣式土器	高並垣式土器	中原Ⅲ式(一野Ⅰ式)土器 中原Ⅳ式(一野Ⅱ式)土器	別府原式土器(新)	石坂Ⅰ式土器 石坂Ⅱ式土器
		下末宝式土器	陽弓式土器	陽弓式土器	陽弓式土器(東台式土器)	陽弓式土器(東台式土器)	中原Ⅴ式土器		
	円筒形押型土器	弘法原式土器	弘法原式土器	川原田式土器 稲荷山式土器	川原田式土器 稲荷山式土器	蒲生・上の原タイプ(弘法原式)土器 稲荷山式土器	下剥峯式・桑ノ丸式土器	下剥峯式・桑ノ丸式土器	
中葉	狭脚な平底の深鉢形押型土器	百花台Ⅰ式土器	百花台Ⅰ式土器	早水台式土器	早水台式土器	早水台式併行期土器	早水台式併行期土器	早水台式併行期土器	
		百花台Ⅱ式土器	百花台Ⅱ式土器	下管生B式土器	下管生B式土器	下管生B式併行期土器	下管生B式併行期土器	下管生B式併行期土器	
		百花台Ⅲ式土器	百花台Ⅲ式土器	田村式土器	田村式土器 (ヤトコロ式土器)	沈目式土器	田村式併行期土器	田村式併行期土器	
		手向山式土器	手向山式土器	手向山式土器	手向山式土器	手向山式土器	手向山式土器	手向山式土器	
	後葉	妙見・天道ヶ尾式土器 平袴式土器 以降、省略							

査では、中原式系土器以外でも良好な資料があったため紹介したい。

写真4（『蒲生・上の原遺跡』報告書第17図4）は、小破片であるため器形の形状が分かり辛いですが、器形の傾きと薄さから円筒形というより底部に向かって窄まる深鉢形の条痕文であると思われる。中原式系土器よりさらに古い可能性があり縄文時代早期前半の野田山式土器か高並垣式土器の属性に類似する九州の縄文時代早期前葉の編年的研究を行う上で貴重な資料であろう。

写真5（報告書第23図8）は、口縁部がやや内湾する無文土器である。また、瘤を貼り付けており、瘤の位置と無文で内湾する特徴から陽弓式土器である。この陽弓式土器は、一野式系土器の中では下末宝式土器と併行する時期にあるため、当地域では、中原Ⅳ式土器の後の時期に当遺跡で用いられていたと考えられる。

以上のように蒲生・上の原遺跡では、縄文時代前葉から中葉に、古くは、野田山式土器か高並式土器の土器に始まり、中原Ⅳ式土器、陽弓式土器、中原Ⅲ式土器、川原田式土器、稲荷山式土器、早水台式土器の順で用いられていたと考えられる。

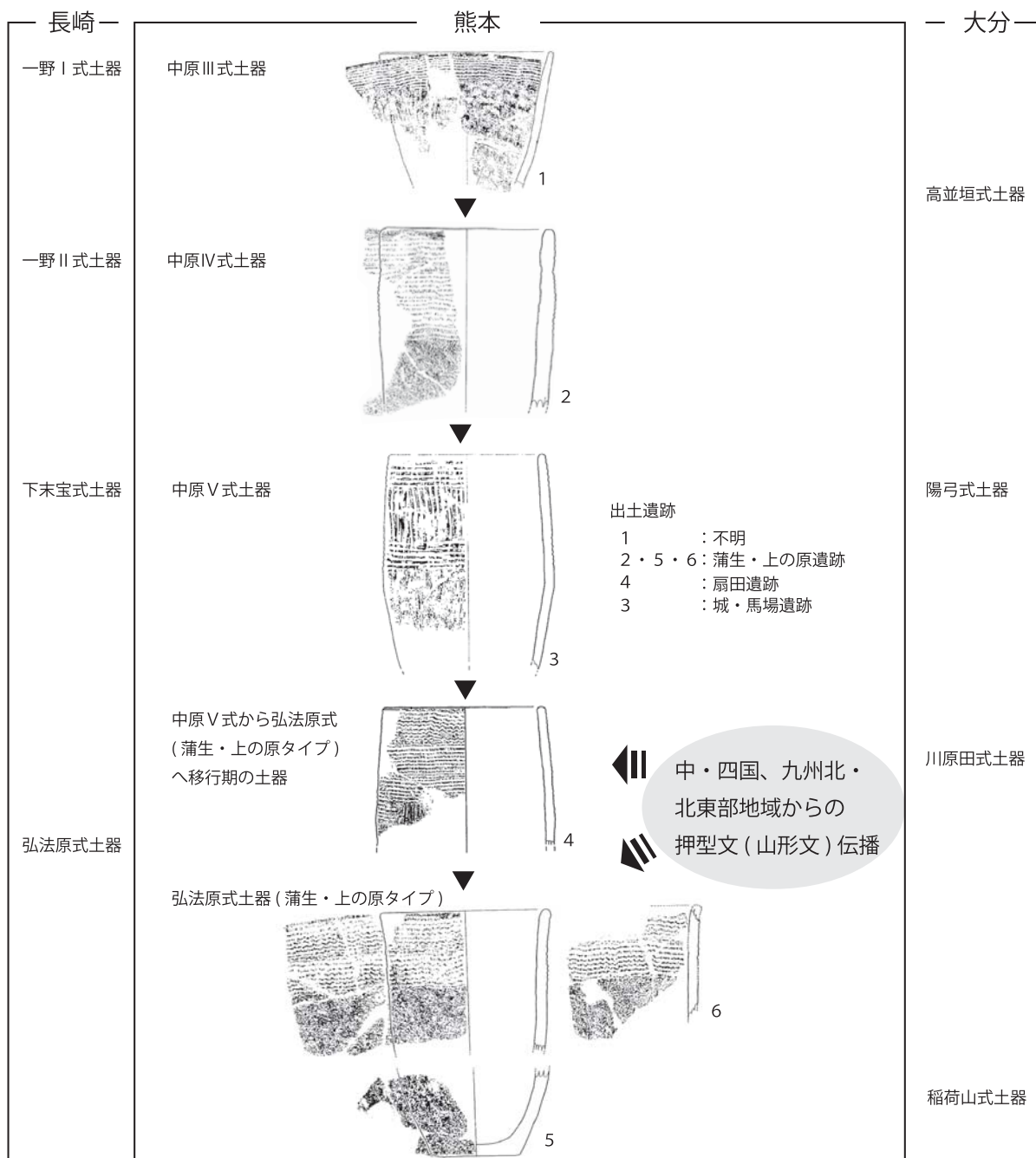
5. 中原式Ⅲ～Ⅴ土器の分析からみる一野式系土器との関係

中原式系土器で最も古い縄文時代早期前葉の中原Ⅰ・Ⅱ式土器は、口縁部外面に貝殻腹縁を施す属性をもち、九州の他地域では小ヶ倉式土器・政所式土器などと併行する土器である。一方で中原Ⅲ～Ⅴ式土器の実態が分かり辛かったため、これまでよく「中原Ⅲ～Ⅴ式土器」と一括りにした表現で記載される事が多かった。多くの研究者は、中原Ⅲ～Ⅴ式土器と一野式土器とが同一か類似するものではないかと思いつつもこれまで別々の表記がされてきた。今回、木崎氏が中原式土器の型式設定で用いた蒲生・上の原遺跡の土器を調査した結果、その中原Ⅲ～Ⅴ式土器の実態を解明する手がかりを得た。その資料調査の結果を踏まえて中原Ⅲ～Ⅴ式土器の分析を基に、一野式系土器との関係をみていく。

さて、中原Ⅲ式土器については、貝殻腹縁により押し引かれた文様帯の狭い条痕文を施す事や山形押型文のような細かい波状のものであるが、木崎氏が1996年の編年表で中原Ⅲ式土器とした第2図9番の土器は、資料調査の結果から円筒形山形文土器である事から弘法原式土器の範疇の土器であった。ただし、弘法原式土器は、一般的に押型文土器を土器外面全面に施文するが、この第2図9番は、山形文様より下位が無文である事から、中原Ⅳ・Ⅴ式土器の貝殻条痕文の文様帯に、押型文土器が伝播し始めた段階に文様置換が起こった土器の可能性もある。そのため、弘法原式土器の中でも古い土器である可能性が考えられる。本来、中原Ⅲ式土器は、貝殻腹縁による押し引く文様帯の狭い条痕文であるため、この第2図9番の土器は、中原Ⅲ式土器から分離させて考えたが良からう。第2図9番は、中原式系土器と器形は類似するものの、文様が山形文でその文様帯下位が無文である特徴をもつため、中原Ⅲ式土器から分離させて「蒲生・上の原タイプ」として設けたい。この土器は、大枠で弘法原式土器の一種であるが、異なる点は弘法原式土器ではあまり見られない山形文の下位が無文帯である特徴を持つ。以上の結果、この山形文の「蒲生・上の原タイプ」の土器のものを除けば、中原Ⅲ式土器と一野Ⅰ式土器に相違点もなく、貝殻腹縁により押し引かれた条痕文の文様帯が狭い特徴をもつ中原Ⅲ式土器が一野Ⅰ式土器と同一型式と言えよう。

次に中原Ⅳ式土器は、今回資料調査した第2図13からも判るように、円筒形条痕文土器で、中原Ⅲ式土器と比べて条痕文を施す文様帯の幅が広い。中原Ⅳ式土器に関しては、一野式系土器の一野Ⅱ式と全ての属性が一致している事から同一型式である。

中原Ⅴ式土器は今回の資料調査を行った蒲生・上の原遺跡からは出土していなかった。中原Ⅴ式土



第3図 資料調査結果による中原Ⅲ～Ⅴ式土器の編年案 (任意縮尺)



第4図 宮崎県五ヶ瀬町三ヶ所神社裏出土土器 (S = 1/3)

器は、中原Ⅳ式土器に比べて条痕文の施文方法が粗いように思われる。この事は、一野式系土器の下末宝式土器で見られる施文技術が不規則になる退化現象と類似性がある。中原Ⅴ式土器に限り、下末宝式土器と同一型式と言うよりは時間的に併行関係にある土器と考えた方が良いのではなかろうか。つまり、中原Ⅲ式土器と一野Ⅱ式土器が同一様式の土器群として势力的に広域に分布していたが、続く時期の中原Ⅴ式土器が熊本県周辺で、下末宝式土器が長崎県周辺で各々地域性のある土器に変化するようである。

そして、中原Ⅴ式土器から蒲生・上の原式土器（第2図9番）への変遷を知る更に良い資料がある。扇田遺跡から出土した第3図3の資料は、中原Ⅳ・Ⅴ式土器で見られる貝殻条痕文に山形文が組み合わされた土器であり、中原Ⅴ式土器から第3図5・6への変遷を繋ぐ土器と言えよう。現在、弘法原式土器は、稲荷山式土器（筆者は川原田式土器も含むと考えている）と併行関係にある意見が多く、実際、木崎氏が中原式土器を設定した当時、中原Ⅲ式土器を稲荷山式土器と併行関係で考えている。以上の結果から、中原Ⅲ～Ⅴ式土器は、「中原Ⅲ式土器→中原Ⅳ式土器→中原Ⅴ式土器→蒲生・上の原タイプ」（第3図）の順で変遷すると考えられる。

6. 一野式系土器（中原Ⅲ～Ⅴ式土器）の分布からみた様相

それでは、九州における一野式系土器と中原Ⅲ～Ⅴ式土器の出土遺跡の分布からその様相を窺う。

長崎県内の一野Ⅰ式土器は、島原市畑中遺跡、南島原市宮野遺跡・上畔津遺跡で出土している。一野Ⅱ式土器は、島原市一野遺跡・稗田原遺跡、南島原市下末宝遺跡・大崎鼻遺跡・古作遺跡、雲仙市浚松遺跡、諫早市鷹野遺跡・西輪久道遺跡・牛込A・B遺跡、大村市岩名遺跡などで出土している。下末宝式土器は、南島原市の下末宝遺跡で出土している。長崎県内では島原半島、諫早市、大村市に分布する（渡邊 1999）状況は、今の研究でもさほど変わってないが、最近でも続々と島原半島で出土事例が増えている。

佐賀県では、吉野ヶ里町の戦場ヶ谷遺跡において長崎県で出土する一野Ⅱ式土器に比べて条痕文が若干波状のうねりが強い一野Ⅱ式土器が出土している。

福岡県の状況は、林潤也氏が「円筒形捺糸文土器」と呼ぶ一野式系土器と併行するであろう土器が分布している。林氏は、一野式土器分布圏の縁辺部であるため、折衷土器の円筒形捺糸文土器を生み出したと説明している（林 2006）。遠部氏も指摘しているように（遠部・小林・宮田 2007）、おそらく、福岡県では、早期前葉に松木田式土器から浦江式土器と変遷するが、それら捺糸文を施文する伝統を受け継ぎ、一野Ⅰ・Ⅱ式土器に捺糸文を転換して用いた可能性があるが、一野Ⅰ式・Ⅱ式、下末宝式土器のいずれに伴うかは今後も引き続き検討が必要である。円筒形捺糸文土器は、春日市原ノ口遺跡、大野城市本堂遺跡などで出土している。

本稿で一野式系土器と中原Ⅲ～Ⅴ式土器の関係が判明した。その中原Ⅲ～Ⅴ式土器の分布については木崎氏の研究（1996・1998）に詳しく、中原Ⅲ式土器は、益城町櫛島遺跡、御船町久保遺跡、人吉市村山閤谷遺跡、山江村狸谷遺跡と大丸・藤ノ迫遺跡から出土している。中原Ⅳ式土器は、山鹿市蒲生・上の原遺跡、熊本市富応遺跡・カブト山遺跡、益城町櫛島遺跡、御船町久保遺跡・干無田遺跡、人吉市村山閤谷遺跡、山江村狸谷遺跡と大丸・藤ノ迫遺跡から出土している。中原Ⅴ式土器は、和水町中原西原遺跡、熊本市カブト山遺跡・尾窪遺跡、御船町久保遺跡、山江村深水・谷川遺跡、人吉市白鳥平A・B遺跡から出土している。

宮崎県の上野原町三ヶ所神社浦遺跡から中原式系土器が出土している。この資料（第4図）は1998年に遠部慎・重留康弘両氏とともに資料調査し、資料紹介を行った事がある（大坪・遠部・重留 2005）。

表2 宮崎県の中原Ⅲ～Ⅴ式土器
出土遺跡一覧（山下2012一部抜粋）

地区	番号	遺跡名	所在地	中原Ⅲ式	中原Ⅳ式	中原Ⅴ式
県北	1	古城	西臼杵郡高千穂町	○	○	
	2	平谷	西臼杵郡日之影町			
	3	三ヶ所神社裏	西臼杵郡五ヶ瀬町			○
	4	森ノ上	延岡市北浦町	○	○	
	5	笠下Ⅳ区	延岡市北方町			
	6	山田	延岡市小川町			
	7	吉野第2	延岡市吉野町	○		
	8	板平	日向市		○	
	9	内野々	東臼杵郡美郷町西郷区			
県央	10	蔵座村	児湯郡川南町		○	○
	11	登り口第1	児湯郡川南町			
	12	住吉B	児湯郡川南町			○
	13	中ノ迫第2	児湯郡川南町			○
	14	尾花坂上	児湯郡川南町			
	15	野首第1	児湯郡高鍋町			○
	16	野首第2	児湯郡高鍋町	○	○	
	17	老瀬坂上第3	児湯郡高鍋町	○	○	
	18	向原第1	児湯郡新富町	○		
	19	別府原	西都市・宮崎市佐土原町		○	
	20	木脇	東諸県郡国富町	○	○	
	21	松元	東諸県郡国富町			
	22	下屋敷	宮崎市佐土原町			
	23	上ノ原	宮崎市佐土原町			
	24	内城跡	宮崎市佐土原町		○	○
	25	長藪原	宮崎市佐土原町			
	26	橋山第1A地区	宮崎市高岡町			○
	27	橋山第2	宮崎市高岡町			○
	28	小田元第2	宮崎市高岡町	○		
	29	前原北	宮崎市			○
	30	堂地西	宮崎市		○	
	31	浦田	宮崎市清武町			○
	32	上猪ノ原第2地区	宮崎市清武町			
	33	白ヶ野第1	宮崎市			○
	34	白ヶ野第2・第3	宮崎市			○
	35	山田第1	宮崎市清武町			○
	36	下星野	宮崎市清武町			
	37	ズクノ山第2E地区	宮崎市田野町			○
	38	前ノ原第2	宮崎市田野町	○		
	39	芳ヶ迫第3	宮崎市田野町			○
	40	砂田	宮崎市田野町		○	○
	41	鹿毛第3	宮崎市田野町	○	○	○
	42	雀ヶ野第3	都城市高城町	○	○	○
	43	伊勢谷第1	都城市関之尾町	○		
44	岩立	都城市五十町			○	
45	東城原第3	小林市野尻町			○	
46	天ヶ谷	小林市野尻町			○	
47	椋野第1	えびの市		○		
48	妙見	えびの市	○	○		
49	手仕山	えびの市	○			
50	上藪	小林市	○	○		
51	大平	小林市	○			
52	高津佐	小林市	○	○		
53	内屋敷	小林市	○	○		

表3 鹿児島県の中原Ⅲ～Ⅴ式土器
出土遺跡一覧（相美2015抜粋・改変）

番号	遺跡名	所在地	中原式	
			Ⅲ・Ⅳ	Ⅴ
北薩摩内陸地域				
2	米置	伊佐市大口	●	
4	勝毛	伊佐市大口	●	●
5	陣之尾	伊佐市大口	●	
15	中津川城跡	さつま町		●
16	石打第2地点	湧水町	●	
18	木場A	湧水町	●	
19	花ノ木第Ⅳ地点	湧水町	●	
22	中尾田	霧島市横川町	●	
24	石峰	霧島市溝辺町	●	
北薩摩海岸域				
29	柴引a	出水市高尾野町		●
30	中郡遺跡群	出水市野田町	●	●
32	諏訪ヶ原	薩摩川内市東郷町		●
34	計志加里	薩摩川内市	●	
36	霜月田	薩摩川内市	●	
39	松尾平	いちき串木野市	●	
40	瀧之段	いちき串木野市		●
41	市ノ原第1地点	いちき串木野市		●?
42	飯牧段	日置市東市来町		●
47	市ノ原第3地点	日置市東市来町	●	●
南薩摩地域				
49	フミガキ	鹿児島市福山町	●	
50	前原	鹿児島市石谷町		●
51	仁田尾中A・B	鹿児島市石谷町		●
57	稲荷原	日置市伊集院町	●	
60	窪見ノ上	日置市伊集院町	●	
64	諏訪前	南さつま市金峰町	●	
66	宗円堀	南さつま市金峰町	●	
67	頭無迫田	南さつま市金峰町	●	
70	桜谷	南さつま市金峰町	●	
81	椿ノ原	南さつま市加世田	●	
90	永田西	南九州市川辺町	●	
薩摩半島東半域				
103	建昌城跡第Ⅰ区			●
都城盆地周辺域				
111	蕨野B	志布志市松山町	●	
115	高古塚	曾於市大隅町	●	
121	西原	曾於市末吉町		●
122	関山	曾於市末吉町	●	
123	関山西	曾於市末吉町	●	
124	桐木	曾於市末吉町		●
	桐木耳取	曾於市末吉町・財部町	●	
130	永磯	霧島市福山町		●
132	城ヶ尾	霧島市福山町	●	
133	上野原2・3地点	霧島市国分	●	
	上野原10地点	霧島市国分	●	●
大隅半島域				
144	横堀	志布志市有明町	●	
156	野里小西	鹿屋市		●

当時は、一野Ⅳ（中原Ⅳ式）土器としていたが、今改めて確認すると器壁の作りの粗さ、文様も縦・横方向の施文が粗さから中原Ⅴ式土器であろう。さて、宮崎県の中原Ⅲ～Ⅴ式（一野式系）土器状況に関しては、山下大輔氏が一覧表（表2）のように集成している（山下 2012）。この結果、中原Ⅲ～Ⅴ式（一野式系）土器は、宮崎県内全域に分布する事が分かる。

鹿児島県の出土状況については、相美伊久雄氏が一覧表（表3）のように集成している（相美 2015）。この結果、中原Ⅲ～Ⅴ式（一野式系）土器は、薩摩半島で多く見つかっており、大隅半島での出土例は少ない状況である。近年では鹿児島県曾於郡大崎町の天神段遺跡で一野Ⅱ式土器（中原Ⅳ式土器）が出土（立神・眞邊他 2018）しており、中原Ⅲ～Ⅴ式（一野式系）土器は、大分県や福岡県北を除いて九州一円で広域に分布する様相が見られる。

おわりに

資料調査以前から中原Ⅳ式土器に関しては、一野式土器と非常に似ている土器であると思っていた。そして、恐らく他の研究者も同感であろう。この中原Ⅲ～Ⅴ式土器と一野式系土器を比較する場合に、中原Ⅳ式土器以外の中原Ⅲ・Ⅴ式土器の解釈が難しかったのではないかと考えられる。今回行った資料調査を切っ掛けとして中原Ⅲ～Ⅴ式土器の検討を深めた事により、一野式系土器との関係性が本稿の通り理解できた。一野式系土器と中原Ⅲ～Ⅴ式土器について検討を行った結果、一野Ⅰ・Ⅱ式土器と中原Ⅲ・Ⅳ式土器は、同一の土器と見て良いことが判明した。そして、次の時期の本州から押型文土器が流入を向える直前の貝殻文円筒形土器の終焉の土器である下末宝式土器と中原Ⅴ式土器に関しては、器形や文様施文の面で全く同じ土器とは言い難く、下末宝式土器が長崎県周辺で、中原Ⅴ式土器が熊本県周辺で各々在地化し分布した地域性のある土器であると考えたい。

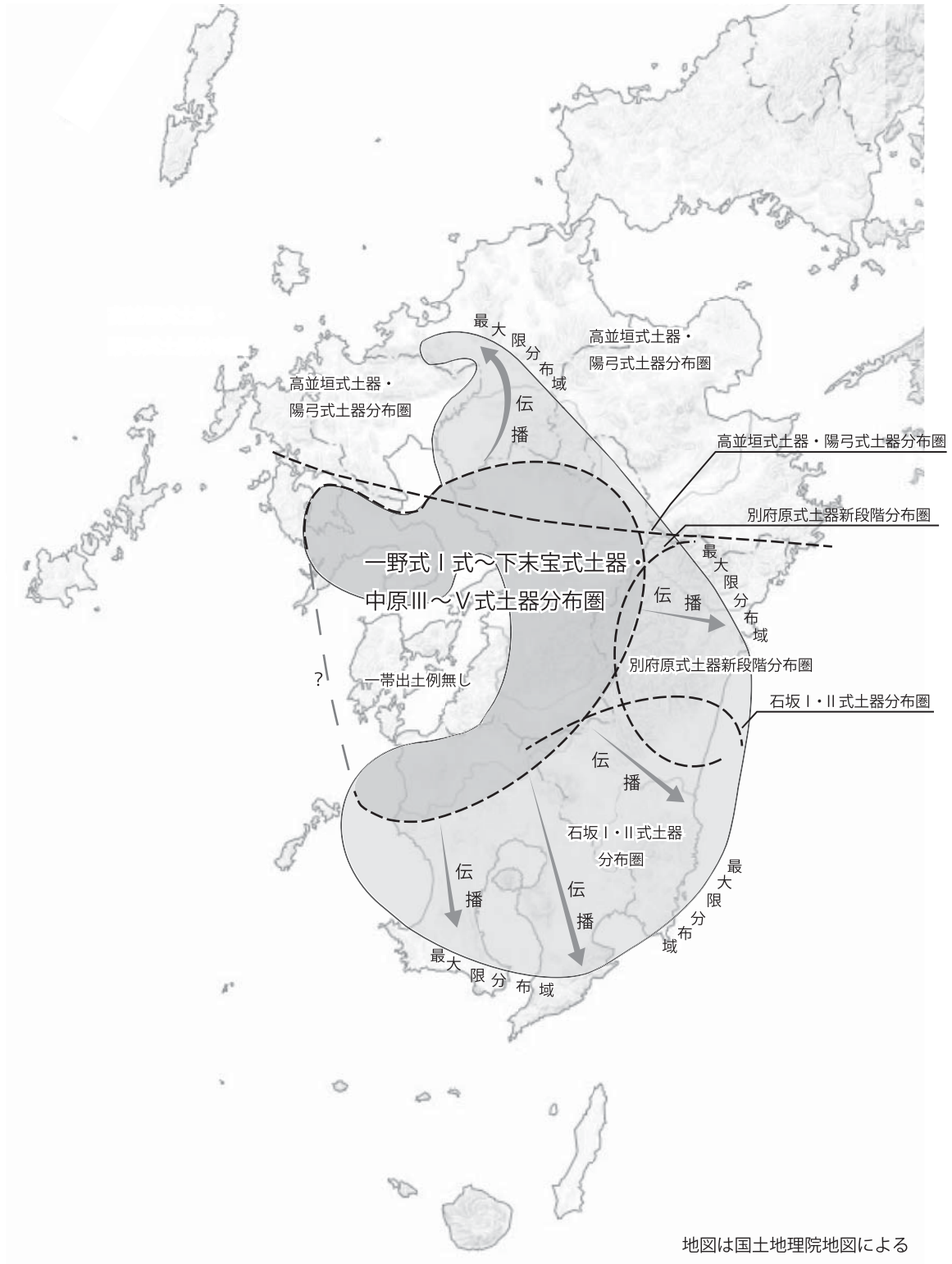
一野Ⅰ・Ⅱ式、下末宝式土器（中原Ⅲ～Ⅴ式）土器は、大分県や福岡県北を除いて九州一円で広域に分布する（第5図）が、その周辺で同時期の土器については、佐賀県・福岡県・大分県で高並垣式・陽弓式土器が分布する。宮崎県では、別府原式土器が分布し、鹿児島県では、石坂Ⅰ・Ⅱ式土器が分布する。一野Ⅰ・Ⅱ式、下末宝式土器（中原Ⅲ～Ⅴ式）土器は、高並垣式土器、陽弓式土器、別府原式土器、石坂Ⅰ・Ⅱ式土器と分布圏が重なりを見せる事もあるが、その地域で主体として用いられていた土器は何で、客体の土器は何かなど細かいところでは、今後検討する課題はある。そういう擦り合わせを重ねる事で、今後更に九州の縄文時代早期の編年を強靱なものにしていきたい。

【謝 辞】

本稿の執筆に際して熊本県文化課、熊本県文化財資料室、矢野裕介、渡邊文雄諸氏に御教示・御協力を賜った。記して厚く御礼を申し上げる次第である。

【引用・参考文献】

- 赤司善彦 1994『原（はる）遺跡』 福岡県教育委員会
麻生優 1968『岩下洞穴の発掘記録』 佐世保市教育委員会
荒木伸也・本多和典 2018 『宮野遺跡』 南島原市教育委員会
市川浩文 1999『戦場古墳群』 戦場ヶ谷遺跡他 佐賀県教育委員会
今村結記 2016『宮崎県の遺跡における貝殻文円筒形土器と押型文土器のあり方』『貝殻文と押型文』平成26年度 宮崎考古学会研究会資料集 宮崎考古学会県南例会実行委員会
井上義也 2002『原ノ口遺跡』第33集 春日市教育委員会



第5図 一野 I 式 ~ 下末宝式土器と中原 III ~ V 式土器の分布域

- 上杉彰紀 2004「別府原式土器」とその周辺『九州縄文時代早期研究ノート』第2号 九州縄文時代早期研究会
- 上杉彰紀 2005「政所式土器」研究の現状と課題『九州縄文時代早期研究ノート』第3号 九州縄文時代早期研究会
- 宇野慎敏 2000『貫・丸尾遺跡』(財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室
- 浦田和彦 1992『一野遺跡』長崎県有明町教育委員会
- 大野安生・松川憲毅 2000「岩名遺跡」『黒丸遺跡ほか発掘調査概報』Vol.2 1997～1999 大村市教育委員会
- 大坪芳典 1998「野田遺跡出土の川原田式土器」『おおいた考古』第9・10集 大分県考古学会
- 大坪芳典 1998「早水台遺跡の押型文土器－表面採集資料の紹介－」『Fragments』創刊号 さくら研究会
- 大坪芳典・遠部慎・川内野篤 1998「早水台遺跡採集資料(井上コレクション)の紹介」『Fragments』創刊号 さくら研究会
- 大坪芳典・遠部 慎 1999「早水台式土器の新例－竹田高校収蔵資料の提起する問題－」『南九州縄文通信』No.13 南九州縄文研究会
- 大坪芳典・遠部 慎 1999「東九州における押型文土器の様相－黒山遺跡出土土器の分析－」『第11回人類史研究会発表資料』人類史研究会
- 大坪芳典 2000「大分県の押型文土器の一例－別府市尾崎園・野田遺跡について－」『Fragments』第2号 さくら研究会
- 大坪芳典・遠部 慎 2000「早水台式土器の器種－屈曲する胴部に関する覚書－」『別府大学付属博物館だより』No.43 別府大学付属博物館
- 大坪芳典 2003「戦場ヶ谷遺跡の押型文土器」『利根川』24・25 利根川同人会
- 大坪芳典・遠部 慎・重留 康弘 2005「三ヶ所神社裏遺跡整理ノート」『九州縄文時代早期研究ノート』第3号 九州縄文時代早期研究会
- 大坪芳典 2006「縄文時代早・前期の遺物」『権現脇遺跡』長崎県深江町(現南島原市) 教育委員会
- 大坪芳典 2007「九州における押型文土器様式の壺形土器－南島原市下末宝遺跡・島原半島の資料をもとに－」『西海考古』第7号 西海考古同人会
- 大坪芳典 2009「環境に影響を受けた九州の押型文土器－円筒形押型文土器・壺形土器について－」『南の縄文・地域文化論考－新東晃一代表還暦記念論文集』上巻 南九州縄文研究会・新東晃一代表還暦記念論文集刊行会
- 大坪芳典 2012「島原半島における押型文土器研究の再考」『九州縄文時代早期研究ノート』第5号 九州縄文時代早期研究会
- 大坪芳典 2015a「西北・西九州における貝殻文円筒形土器と押型文土器の様相」『貝殻文と押型文』平成26年度宮崎考古学会研究会資料集 宮崎考古学会県南例会実行委員会
- 大坪芳典 2015b「西北・西九州における貝殻文円筒形土器と押型文土器の様相」の意義について『肥前史談叢』肥前史談叢の会(筆者作成ホームページ <http://www5.hp-ez.com/hp/otsubo01>)
- 大坪芳典 2016「西北九州における貝殻文円筒形土器と押型文土器の編年」『西海考古』第9号 西海考古同人会
- 大坪芳典 2020a「【前編】小ヶ倉式土器と九州縄文時代早期前葉の貝殻腹縁刺突文土器」『九州縄文時代早期研究ノート』第6号 九州縄文時代早期研究会
- 大坪芳典 2020b「【後編】西北九州の貝殻円筒形土器と押型文土器研究の到達点」『九州縄文時代早期研究ノート』第6号 九州縄文時代早期研究会
- 大野安生・松川憲毅 2000『黒丸遺跡ほか発掘調査概報』(岩名遺跡) Vol.2 1997～1999 大村市教育委員会
- 岡本勇 1966「尖底土器の終焉」『物質文化』8 物質文化研究会
- 岡本東三 2015「九州島における押型紋土器の出現とその前夜－円筒形貝殻紋土器と押型紋土器の相克－」『高野晋司氏追悼論文集』高野晋司氏追悼論文集刊行会

- 小倉正五 1991『一般国道387号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』（中原遺跡） 宇佐市教育委員会
- 遠部慎 1998「川原田式土器小考」『おおいた考古』第9・10集 大分県考古学会
- 遠部慎 1999「下城遺跡群の整理ノート」『おおいた考古』第11集 大分県考古学会
- 遠部慎 2000「ヤトコロ式土器と出水下層式土器の関係」『九州旧石器』第4号 九州旧石器文化研究会
- 遠部慎 2003a「『柿原タイプ』とその周辺—久留米市安国寺、横道遺跡からの着想ノート—」『九州縄文時代早期研究ノート』第1号 九州縄文時代早期研究会
- 遠部慎 2003b「九州における出現期押型文土器概観—赤塚亨氏に対するコメントにかえて—」『利根川』24・25 利根川同人会
- 遠部慎 2004a「九州における押型文土器出現期（予察）」『古代』第114 早稲田大学考古学研究会
- 遠部慎 2004b「焼成前穿孔土器から見た下剥峰式土器—車坂第3遺跡出土資料からの着想ノート—」『九州縄文縄文時代早期研究ノート』第2号 九州縄文時代早期研究会
- 遠部慎 2007「北部九州における縄文時代草創期～早期前半の土器群とC14年代測定」『九州における縄文時代早期前葉の土器様相』第17回九州縄文研究会福岡大会 九州縄文研究会
- 遠部慎・宮田佳樹 2008「宮崎県における土器付着炭化物の炭素14年代測定—縄文時代前半期を中心に—」『宮崎考古』21 宮崎県考古学会
- 遠部慎 2009「円筒形貝殻文土器群の炭素14年代測定」『南の縄文・地域文化論考—新東晃一代表還暦記念論文集』下巻 南九州縄文研究会・新東晃一代表還暦記念論文集刊行会
- 遠部慎 2015「南九州における押型文土器期の炭素14年代測定」『貝殻文と押型文』平成26年度宮崎考古学会研究会資料集 宮崎考古学会県南例会実行委員会
- 遠部慎 2016「縄文時代草創期・早期の縄紋土器型式期の実年代比定（西日本）」『日本列島における縄紋土器出現から成立期の年代と文化変化』中央大学人文科学研究所講演会
- 賀川光夫 1955『早水台』大分県教育委員会
- 賀川光夫 1960「早期縄文式土器の新資料—大分県直入郡荻町政所式土器出土—」『考古学雑誌』第46巻第3号 日本考古学会
- 賀川光夫 1965「縄文文化の発展と地域性—九州東南部—」『日本の考古学』2 河出書房新社
- 賀川光夫 1977「熊本県の円筒形土器」『考古学論叢』4 別府大学考古学研究会
- 賀川光夫 1982「押型文土器の編年—縄文早期から前期への系譜」『政所馬渡』別府大学博物館
- 賀川光夫 1998「大分県川原田岩陰の再検討」『おおいた考古』第9・10集 大分県考古学会
- 片岡宏二 1998「宝満川流域の縄文土器概観」『干潟向畦ヶ浦遺跡』小郡市教育委員会
- 金丸武司 2004「宮崎における縄文時代早期前半の土器群—別府原式土器の設定—」『宮崎考古』第19号 宮崎県考古学会 木崎康弘 1996「第V章総括」『蒲生・上の原遺跡』熊本県教育委員会
- 木崎康弘 1995『無田原遺跡』熊本県教育委員会
- 木崎康弘 1996『蒲生・上の原遺跡』熊本県教育委員会
- 木崎康弘 1998a「中原式土器について」『九州縄文土器編年の諸問題—早期後半土器の現状と課題—』九州縄文研究会
- 木崎康弘 1998b「中九州西部押型文土器の編年」『九州の押型文土器—論攷編—』縄文集成シリーズ3 九州縄文研究会
- 木下修 1978『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 筑紫郡那珂川町大字中原所在深原遺跡の調査』福岡県教育委員会
- 九州縄文研究会 2007『九州における縄文時代早期前葉の土器様相』第17回九州縄文研究会福岡大会 九州縄文研究会
- 工藤雄一郎 2015「王子山遺跡の炭化植物遺体と南九州の縄文時代草創期土器群の年代」『国立歴史民俗博物館研

究報告』第196集 国立歴史民俗博物館

- 工藤雄一郎 2018「縄文時代草創期の古環境と¹⁴C年代」『九州旧石器（縄文時代開始期の土器群と石器群—移行期の地域動態を探る—）』第21号 九州旧石器文化研究会
- 黒川忠広 2002『南九州貝殻文系土器』Ⅰ～鹿児島県～ 南九州縄文研究会
- 黒川忠広 2002『南九州貝殻文系土器』Ⅱ～宮崎・熊本・大分県～ 南九州縄文研究会
- 黒川忠広 2003「南の押型文土器」『利根川』24・25 利根川同人会
- 桑畑光博・上田 耕・雨宮瑞生 1993「貝殻円筒形土器と押型文土器の関係—宮崎・鹿児島両県における出土状況の検討—」『南九州縄文通信』No.7 南九州縄文研究会
- 甲野勇 1976『縄文土器の話』学生社
- 小林謙一 2019『九州における縄文時代草創期研究の到達点—各地の定住生活の様相—』第29回九州縄文研究会宮崎大会発表用紙・資料集 九州縄文研究会
- 片岡宏二 1998「宝満川流域の縄文土器概観」『干潟向畦ヶ浦遺跡』 小郡市教育委員会
- 坂田邦洋 1972『国東町文化財調査報告書 縄文時代に関する研究 成仏岩陰遺跡の調査』国東町教育委員会
- 相美伊久雄 2015「鹿児島県における貝殻文円筒形土器と押型文土器」『貝殻文と押型文』平成26年度宮崎考古学会研究会資料集 宮崎考古学会県南例会実行委員会
- 坂本嘉弘 1995「西日本の押型文土器の展開—九州からの視点—」『古文化談叢』第35集 九州古文化研究会
- 坂本嘉弘 1998「東九州の押型文土器の現状と課題」『九州の押型文土器—論攷編—』縄文集成シリーズ3 九州縄文研究会
- 重留康宏 2003「宮崎県西部における縄文早期遺跡の概観—出土土器を中心にして—」『九州縄文時代早期研究ノート』第1号 九州縄文時代早期研究会
- 近澤康治 2001『横道遺跡Ⅱ』 久留米市教育委員会
- 重留康宏 2004「前原西式土器雑考」『九州縄文時代早期研究ノート』第2号 九州縄文時代早期研究会
- 渋谷格・徳永貞紹・パレオラボ AMS年代測定グループ 2011『小ヶ倉遺跡・入道遺跡・九郎遺跡』佐賀県教育委員会
- 清水宗昭 1974『東台遺跡』 臼杵市教育委員会・臼杵開発株式会社
- 新東晃一 1996「もう一つの縄文文化—南九州の縄文草創期・早期の特徴—」『南九州縄文通信』No.10 南九州縄文研究会
- 鈴木正博 2003「二日市洞穴第6文化層への想い—東台式の制定とその意義—」『九州縄文時代早期研究ノート』第1号 九州縄文時代早期研究会
- 鈴木正博 2004「縄紋式草創期「寿能式」制定とその型式学的射程—地域連続と列島斑との間に存在する振り子—」『古代』第115号 早稲田大学考古学会
- 副島和明・片山巳貴子 1983『諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅰ』長崎県教育委員会
- 竹野孝一郎・綿貫俊一 2004『大分県二日市洞穴—分析編—』九重町教育委員会
- 高野晋司 1983『弘法原遺跡』 吾妻町教育委員会
- 高木正文 1977「九州の円筒土器とその編年の問題」『考古学論叢』4 別府大学考古学研究会
- 田川肇・副島和明・伴耕一郎 1988『百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県教育委員会
- 田川肇 1994『県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県教育委員会
- 多々良友博 1984「九州地方の押型文土器—文様構成から見たその動態—」『金立開拓遺跡』佐賀県教育委員会
- 橘昌信 1970『稲荷山遺跡緊急発掘調査』大分県教育委員会
- 橘昌信 1980『大分県二日市洞穴発掘調査報告書』玖珠郡九重町教育委員会

- 橘昌信 1981「無文土器」『縄文文化の研究』 雄山閣
- 立神倫史・眞邊彩・倉元良文・大坪啓子・森えりこ・岩澤和徳 2018『天神段遺跡3 縄文時代早期編』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財センター
- 辻田直人・竹中哲朗 2003『石原遺跡・矢房遺跡』 国見町教育委員会
- 土橋啓介・渡邊康行 2001『大崎鼻遺跡』 布津町教育委員会
- 堂込秀人 2003「南九州における押型文土器文化期の存在」『利根川』24・25 利根川同人会
- 中間研志 1995『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告37 甘木市所在 柿原Ⅰ縄文遺跡』 福岡県教育委員会
- 西本豊弘編 2009『弥生農耕の起源と東アジア—炭素14年代測定による高精度編年体系の構築—平成16～20年文部科学省・科学研究費 研究成果結果報告』 国立歴史民俗博物館
- 林潤也 2006「北部九州土器の円筒形撚糸文土器」『九州縄文時代早期研究ノート』第4号九州縄文時代早期研究会
- 林潤也 2007「福岡県における縄文時代早期前葉の土器相」『九州における縄文時代早期前葉の土器相』第17回九州縄文研究会福岡大会 九州縄文研究会
- 林潤也 2020「北部九州出土の稲荷山式土器—薬師の森遺跡出土資料の紹介を兼ねて—」『九州縄文時代早期研究ノート』第6号 九州縄文時代早期研究会
- 古門雅高・渡邊康行 1998『広久保遺跡』 長崎県江迎町教育委員会
- 久山高志 1998『西田遺跡』 鳥栖市教育委員会
- 本多和典 2005『下末宝遺跡・上畦津遺跡』 深江町教育委員会
- 本多和典編 2006『権現脇遺跡』 第2集 深江町教育委員会
- 本多和典編 2018『古作遺跡』南島原市文化財調査報告書第10集 南島原市教育委員会
- 前田義人 2004『長野尾登遺跡第3地点3』 (財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室
- 牧尾義則・讃岐和夫 1979『野田山遺跡』 大分市教育委員会・三井不動産株式会社
- 水ノ江和同 1998「九州における押型文土器の地域性」『九州の押型文土器—論攷編—』縄文集成シリーズ3 九州縄文研究会
- 水ノ江和同 2012『九州縄文文化の研究—九州からみた縄文文化の枠組み—』 雄山閣
- 村川逸朗 1992『弘法原遺跡』 吾妻町教育委員会
- 村川逸朗 1994『畑中遺跡』 島原市教育委員会
- 村子晴奈 2019『浚松遺跡・源次広野遺跡・永中道遺跡』 雲仙市教育委員会
- 森醇一郎 1974『白蛇山岩陰遺跡』 伊万里市教育委員会
- 八木澤一郎 1997「上野原遺跡第3工区 国分市」『鹿児島の縄文文化』 国分上野原シンポジウム実行委員会
- 山崎純男・平川裕介 1986「九州の押型文土器」『考古学ジャーナル』267 ニューサイエンス社
- 柳田裕三 2018「西北九州の縄文時代草創期土器群」『九州旧石器（縄文時代開始期の土器群と石器群—移行期の地域動態を探る—）』第21号 九州旧石器文化研究会
- 山下大輔 2005「下剥峯式および桑ノ丸式土器の再検討」『南九州縄文通信』No.16 南九州縄文研究会
- 山下大輔 2009「南九州の押型文土器編年に関する一考察」『南九州縄文通信 南の縄文・地域文化論考』No.20 上巻 南九州縄文研究会
- 山下大輔 2012「宮崎の中原式土器」『九州縄文時代早期研究会』第5号 九州縄文時代早期研究会
- 山下大輔 2015「南九州における押型文土器研究の現状と課題」『貝殻文と押型文』平成26年度宮崎考古学会研究会資料集 宮崎考古会県南例会実行委員会
- 山下大輔 2015「論文「西北・西九州における貝殻文円筒形土器と押型文土器の様相」の意義について」を読む

でのコメント」『肥前史談叢』 肥前史談叢の会

山下大輔 2019「南九州における円筒形押型文土器の編年的位置づけについて—弘法原式土器との関係からみた評価—」『ナベの会考古学論集 和の考古学—藤田和尊さん追悼論文集—』第1集 ナベの会

山下大輔 2020「南九州の円筒形押型文土器とその周辺」『九州縄文時代早期研究ノート』第6号 九州縄文時代早期研究会

渡邊康行 1999「一野式・弘法原式土器の設定をめぐる」『西海考古』創刊号 西海考古同人会

綿貫俊一編 1996『横手遺跡群発掘調査報告書』（陽弓遺跡） 大分県文化財調査報告書第93集 大分県教育委員会

綿貫俊一 1999「九州の縄文時代草創期末からの早期の土器編年に関する一考察」『古文化談叢』第42集 九州古文化研究会